
ソノクロ

白河 たこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソノクロ

【Nコード】

N7230G

【作者名】

白河 たこ

【あらすじ】

冷酷冷女のお嬢様と、金髪チャラ男がたまたま仲良くなった。しかし、お互い悩みがあり、学園生活の中でそれらと戦っていく。

Story - 1

初夏。

蝉が鳴いている。

太陽は笑っていて。

月は泣いて、お前は黒。

高校の、この階段を登りきると昼間の街を展望できる屋上に到達する。ギラギラとしていて、それでもって綺麗なこの街を一望できる。夕方になれば紅蓮の夕日が波打っていて、夜になれば、静寂が待っている。刻一刻と変わり続ける街を望む事が、俺の趣味。

今日も変わらず、金髪のふんわりヘアーを揺らしながら、階段を一步一步進めていく。

「お、おい。なんじゃ、こりゃ」

そして見たもの。

俺が屋上の扉を開け、真っ先に見たもの。

《女子生徒が、飛び降りようとしている》

ここは4階上の屋上。飛び降りたら、即死する。

「お、お前！ なにしてんだ！」

すると、無機質でひんやりとした声が、細々と聞こえてきた。

「自殺するのよ」

「な、なんで」

「疲れたから」

「ちよちよつと待て。もう少し生きてみたらどうだ？」

「……生きていても楽しくない」

まともに会話できることを知り、一安心した俺は少しずつ少女に近付いていく。

「楽しくないことないさ。楽しい事だらけだ。まだ世の中を見てな

「いだろ？」

「……それもそうね」

すると、あっさり飛び降りるのを止めた。

「……あんた名前は？」

目の前で見える彼女はほつそりとしていて、真つ白で、身長が低くて、そして真つ黒の服を纏まとっていた。まるで聖夜に見るシリウスのような輝きを持った彼女。しかし、どこか悲しそうな顔をしていた。

「黒条、黒条由美。こくじょう ゆみ あなたは？」

「俺は園田修斗。そのだ しゅうと」

俺は右手を差し出すと、少女はそれを無視し教室へと帰ってしまった。

Story - 2

その後、俺は昼からの授業を休んだ。

あの少女——黒条由美——のことが気になって、授業に集中できないし、根本的に授業が嫌いだからだ。そして、端的に言えば、ワルだから。

子ども時代に両親を交通事故で失った。その時、唯一の妹は泣きじゃくって大変だったことを覚えている。俺は、頭が真っ白になっていた。冷たい棺の中に、両親を見た。綺麗な顔で、死んでいた。ただ、なにか悲しかった。空気とか泣く声とか、そういうものじゃなくて、なにかが切なかったのだ。

それから、俺はとにかくぐれてみた。自分の思う悪いことを色々してみた。人を殴ってみた。万引きもしてみた。授業放棄とか学校を荒らしてみたりもした。そんなことをして、高校生になった。だが俺は高校生になるに向けて、そろそろ自分を変えたいと思った。

《ところが、何一つ、変わらなかった》

身の回りも、体も、中身も、そして世界も。

なにもかも、変わらないままだった。

だから、今も変わらずぐれている。

じよじよに流れている雲の群れを、ぼんやりとした頭で眺めながらそんなことを思い返していた。てっぺんの太陽に照らされたいくつか千切れ雲があつて、その間から青空が顔を覗かせているいつもの景色。

午後のひととき。

すると、下からいくつかの生徒の声が拾えた。しかし、その声は明らかに楽しい雰囲気のものではなかった。そして、耳を澄ますとそれは危機を感じさせる会話でもあった。

Story - 3

ようは、死ぬな。と、言っていたのだ。

一瞬、嫌な汗をかいた。しかし、それはずっと引いて、頭を入れ替える。

「あの、馬鹿」

俺は、寝転んでいた屋上の床を蹴飛ばして、4階まで階段をかけた。スピードを上げるにつれ、横を流れる景色は、どんどん早くなっていく。早くなつてやがて一本の筋が完成する。しかし、その筋とは裏腹にその時俺は、特にこれといってなにも感じてはいなかった。とにかく、黒条由美の自殺を、どのようにして止めるのかということしか、頭になかった。

「黒条！」

勢いよく声の聞こえた教室のドアを、開けた。開けると、案の定彼女が、窓に身を乗り出していた。いや、実際には窓枠の上に乗っていた。その空気のように見える体を。

「またあなた」

「悪かったな。お前、世の中を見たかったんじゃないのかよ！」

「やっぱりいいわ。だって、どいつもこいつも馬鹿ばかりだし、いくら時代が進んでも、何一つ変わらないんだもの」

「まだその時期じゃないのかも」

なんて言ってみるも、俺も彼女の考えに同感だった。だから、あまりちゃんとした答えは、言えなかった。

「いいの、もう。決めたから」

俺は、もうなにも言えなかった。

言えなかったからこそ、自分を瞬間責めた。

彼女が、身を外へ投げたから。

初夏の空気を疾風の如く切り裂き、1階まで転落していく。その姿を想像した。俺は、また走っていた。その、1階まで。その、彼

女が落ちる所まで。

Story - 4

それから、彼女の濡れた姿を見た。純白の肌に、まるで真珠のような水滴がいくつもついていた。

ちょうど、彼女が身を投げたあの教室は、校舎の裏側にあり、その裏側にはプールがある。どうやら、プールに落ちたらしい。もちろん、それで多少の怪我は負ったが、大事故にはならず済んだらしい。

「お前さ、馬鹿じゃねえのか？」

すると、保健室のベッドに仰向けで寝ていた黒条は、口を開けなかった。

「そもそも、なんでそんなに死にたがるんだよ。別に変わらない世界で変わらずに生きていたら、いいじゃないか」

「……………嫌」

唯一、言ってくれた一言だった。

その後、彼女は放課後まで寝ていた。誰かの寝顔を見たのは、久々だった。でも、その寝顔を見て、俺は驚いた。棺の中の両親に似ていたから。そして、あまりにも綺麗だったから。まるで、毒林檎で眠らされた、針で眠らされたお姫様のような寝顔。細い吐息が心地よく聞こえてきて、そして、いつの間にか俺も寝ていた。ちょうど彼女の寝ているベッドに寄り添った状態で。

ふと目が覚めると、外は赤褐色に染まっていて、雲の隙間から烏が数羽帰路についていた。

そして、目の前には彼女の顔があった。全く笑わない彼女の顔が。「帰る。病院に付き添ってくれない？」

「あ、ああ。別にいいけどさ」

彼女の行き先の病院まで、数キロある。彼女は自分の顔を隠すように黒い日陰傘を差していた。ふちは白くその先に黒いレースのフリルが細くついていた。黒いワンピースに黒い日陰傘。すらっと長

い黒髪。全てを黒に統一した彼女の姿は、美しかった。

その横で歩く俺は、なんだかどこからか切り取られて貼り付けられたようだった。

柄の悪い大きめの私服に、両手をポケットに突っ込んで、本当に浮いていた。まるで、横が別の世界のように感じた。

病院に着いた頃には、既に回りは薄暗くなっていた。

Story - 5

病院の待ち時間、重い沈黙が支配していたが、その重みに押しつぶされそうだったので、なにか話題を提供してみた。

好きな食べ物はないかや、よく見るテレビ番組はないか。好みの音楽はどんなものかなど、一般的な諸々もろもろを聞いてみたが、「特に」と言っ、なにも教えてはくれなかった。つくづく謎の多い少女だ。それから、満天の星や眩いネオンに包まれた静寂の夜道を、2人並んで帰った。が、少しだけ黒条の方が前を行っていた。そして、なぜか分からないけど、俺は彼女の後姿が気に入った。小さくて黒くて白くて、そして優美な彼女の姿に惚れていた。またもこれから先の人生に彼女が居るかどうかは不明だが、今のこの時間が、俺にとっては幸せだった。

「ありがとう。今日は死なずに済んだわ」

と、シニカルな言い方でお礼を言われた。

彼女の家の前で。

何坪占領しているのか分からない敷地に、豪邸としか表現できないレンガ造りの家が聳そびえ立っていて、大きな窓が間隔よく並んでいた。たぶん俺がこの家の持ち主だったから、一日中迷子になっていたろう。だから、とにかく第1感想は「でかい家」としか言いようがなかった。

「今日は、じゃなくて今日も、だろ？」

返答はなかった。

そして、俺の気に入ったその後姿は家の中へと消えていった。

その後、俺も帰路につき、帰宅した頃には既に妹は寝ていた。今日は2人の寝顔を見ることができた。女性の寝顔は美しく、安心できるのだが、どの寝顔も悲しみを感じさせたことに、俺は少しだけ疑問を覚えた。

「ま、愚問か」

Story-5 (後書き)

前回の話で、「日陰傘」と表現していましたが、正しくは「日傘」でした。

御詫びと共に、ここに訂正させていただきます。
申し訳ございませんでした。

Story - 6

後日たまたま朝、校門で黒条に会った。

ミニチュアダックスフンドみたいな長いリムジンカーが、校門前に止まって、その中から黒条が出てきた。本当に、典型的なお嬢様だ。で、また今日も黒いワンピースを纏っていて、さらにそのリムジンカーまでもが漆黒のせいで、2つは一体化しているように見えた。

「よ、よう黒条。お前は本当に一般的に言われる——お嬢様なんだな」

また返答はない。

まるで俺の声が聞こえていなかったかのように、俺の前を素通りし、校舎内に入っていく。

「ちょ、ちよつと待てつて。そもそもなんでお前はこんな平凡な普通高校に入学したんだ？ おかしいだろ。——お嬢様学校とかに行けばよかったのによ」

すると、その透明で圧倒的な圧迫感を感じるその眼が俺の目を見た。

「嫌だったの。周りから——お嬢様と言われることが」

「あ、わりい。もう言わねえ。でもだからってなんで公立なんだ？」

「勉強が嫌い」

必要最低限しか喋らない。

「お、気が合うな。俺も嫌い」

すると、返事はない。

どうやら、根本的に喋る事が嫌い、人の話を聞くことが嫌いらしい。結論、社交性がずば抜けて欠けているということになる。

「で、もう自殺騒動はないけど、諦めたんだな」

「別に」

というわけで、まだ自殺願望はあるらしい。というのも俺の勝手

な憶測でしかない。なんせ、彼女は事実を話そうとしないからだ。

「あなたの親の顔を見たいわ」

「は？」

「礼儀のないあなたに疑問を持つてるの」

「疑問、ね。俺にはお前のそのオーラに疑問を覚えるね」

「で、親は？　どんな人？」

「普通の人。つか、親はもういねえ」

すると、黒条は歩みをそっと止めた。

「死んだんだ。交通事故で。」

かけて、割れて、壊れた。ただ、それだけ。脆かった、弱かった。細くて切れそうな糸でも、ちゃんと繋がってたのに、やっぱり切れた。家族の関係なんて、そんなものなんだって、思い知らされた。

一見、しっかり繋がっているように見えても、切れそうになくても、簡単に壊れてしまう。それは突然もあるし、分かっている時もある。でも、唯一言えるのは、ただそれだけでしかないということ。絆を表す数値なんてないっていうこと。だから、切れた関係を思い返すことしかできない。修復なんてできっこない。わかっていても、辛い」

俺は、言わなくてもいい心の内まで、語っていた。途中で話題が変わったことも分かった。でも、言いたかった。今まで隠してきたなにかをぶちまけたかった。

それが、黒条だったのはなぜか。

今の俺には全然わからない。

ただ、これでいいと思えた。

Story - 7

「そう。それは私も悪かったわ」

ただ、それだけ言い残すと、いつもの速度で、お気に入りの後姿は学生の海に飲まれていった。

放課後、教室で帰る準備をしていると、一瞬で教室の雰囲気が変わった。いい方か、悪い方か。どちらかといえば、悪い方なのか。とにかく、そんな感覚を覚えた。でもなぜなのか。とくに俺はいつものことをしているだけだし、周りのみんなもいつも通り。ただ、ひとつだけ違いを発見した。

教室の入り口に、黒条由美がその誰も近づけようとしないオーラを発しつつ、佇んでいたこと。

そして、俺のことを見つけて、ここに来たこと。

「こ、黒条じゃねえか。どうしたんだよ」

「今日も病院」

「そうか。……なら、一緒に行くか？」

すると、頷いた。

「帰りはリムジンじゃねえのか？」

また頷く。

ゆっくりと校門を出て、数日前に通った歩道を歩く。

紅色に頬を染めた太陽が、灰色で生ぬるい高層ビル群の隙間から顔を覗かせ、まるで好きな人を電柱に隠れて見ているようだった。しかし、それがなんとも言えず綺麗で、低空に潜む雲の袖までもが紅色に染まっていた。

そんな初夏から少したった町の風景は、すっかりとしていて、新鮮味があった。新鮮は春というイメージが根付いていたが、少し考えも変わった。

「で、体の方は治ってきてるのか？」

今度は首を振る。すると、彼女の長くて真っ直ぐで、そしてなに

より艶のあるロングヘアが乱れる。

全て無駄のない動きで、効率よく会話が進んでいるように思えるが、本当に彼女は必要のないことは喋らない。

病院の帰り、彼女はとんでもないことを言ってきた。

「今日は、私の家に寄って」

なんだか、空気が一瞬にして変わった気がした。町に夜を伝える静寂とサイレンの不一致さを物語るほどに、その言葉に俺は、度肝を抜かれた。

「べ、別にいいが、なんでだ？」

「見せたいものがあるの」

なんだ、そりゃ。

町の速度は一定かつ、不規則に動き、俺達はそれに飲まれつつ黒条家に到着した。

その間、俺は一体なにを見せたいのか思考を張り巡らせていた。

刹那、一気に情報が頭を流れる。まるで、止まることを知らない上流の川のように。

そしていくつか考えた。

例えば、なにか創作活動的なことをしたとか、ピアノとヴァイオリンを習っていると、この前話していたから、演奏を見せてくれるとか、両親の顔を俺に見せるとか。

とにかく、そんなことを考えていた。

大きな門を潜って、長い庭を進んだ先に、まるでこの先ラスボス居ます！ 的な扉が立っていた。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7230g/>

ソノクロ

2010年11月20日03時52分発行